

## 「国際理解と平和Ⅱ」 平和を学ぶ—沖縄から見つめ直す平和—

藤田 高弘・三島 徹  
鈴木 善晴・川田 基生  
竹内 史央・大林 直美

**【抄録】** 高校2年生では、沖縄をフィールドとして「平和」の問題を、沖縄戦、沖縄基地問題、沖縄の社会・経済、沖縄の歴史と教育、沖縄の生活様式、沖縄と世界という観点から学習し、世界の平和と共生の問題に自らどのように関わるかを考え、共に学ぶ機会を提供した。

**【キーワード】** 平和、共生、フィールドワーク、学び合い、感性、気づき、社会との関わり、市民

### 1 学年テーマと目標

21世紀に入り世界の平和への脅威が、時には衝撃的に、時には静かに進行しつつある。このような国際社会、日本社会の情勢の中で沖縄を1つのフィールドとし、沖縄戦、沖縄基地問題、沖縄の社会・経済、沖縄の歴史と教育、沖縄の生活様式、沖縄と世界といった幅広い観点からともに学びながら、自分がそれらの諸問題にどのように関わっていくかを考え、共に学ぶ機会を提供した。そして、以下のような学年目標を設定した。

(1)沖縄を1つのフィールドとして世界の平和、共生、人権、異文化理解という社会の諸問題に気づき、感性を高め、自己との関わり方を考え深める。

(2)自己完結型思考ではなく、多様な観点から上記の問題を柔軟に考え、相互の意見や考えを共有し、生徒同士の学びを活性化する。

上記の目標を達成する為に、次のような年間計画で沖縄のフィールドワークを中心にした学習計画を立案した。

#### 一年間の活動計画と記録

	授業日	学習内容
1	4/10	1年間の総合人間科の流れとテーマ説明：事前研究グループ決め、アンケート実施
2	4/17	*1時間授業、事前研究テーマ決め、役割分担決め、準備
3	4/24	プレ研究調査、発表・討論準備 ①沖縄戦グループ ②沖縄基地問題グループ ③沖縄の社会・経済グループ ④沖縄の歴史と教育グループ ⑤沖縄と世界グループ ⑥沖縄の生活様式グループ
4	5/08	プレ研究調査、発表・討論準備
5	5/29	プレ研究の発表（1） 1グループ約15分程度の発表
6	6/5	沖縄研究グループ決定と研究テーマ決め、研究旅行委員選出
7	6/26	フィールドワークのオリエンテーション 「共同の中での学び合い」教育学部 植田健男先生の講義
8	7/03	一日総合大学 14講座展開（名古屋大学研究科、愛知県芸術大学、名古屋女子大学）
9	9/04	フィールドワーク行程の検討、フィールドワーク先との交渉
10	9/11	フィールドワークの追及内容と質問内容の確認、FW先への依頼文の完成
11	9/25	沖縄フィールドワーク質問状の完成
12	10/09	グループ別沖縄研究概要の完成、フィールドワーク先の行程表完成
13	10/16	沖縄研究旅行準備、フィールドワーク準備
14	10/23	沖縄研究旅行準備、フィールドワーク準備、研究旅行全体の準備
15	11/04	沖縄研究旅行、沖縄フィールドワーク最終準備 11/11, 12, 13, 14沖縄研究旅行
16	11/20	沖縄フィールドワーク発表準備
17	12/04	1時間準備 沖縄フィールドワーク・グループ別クラス単位発表（1時間）
18	12/11	沖縄フィールドワーク・グループ別クラス単位発表（2時間）
19	01/15	沖縄研究集録計画、役割分担決め、沖縄研究集録作成
20	01/22	沖縄研究集録作成
21	02/19	沖縄研究集録作成、集録原稿完成

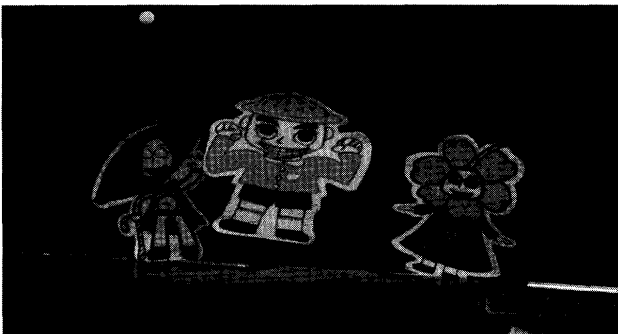
## 2 沖縄事前研究

11月の沖縄研究旅行のプレ研究として、1クラスの生徒を機械的に6グループに分け以下のテーマで事前研究し、授業で発表した。発表時間は1グループ約15分程度で、写真、寸劇、クイズ等の形式で生徒が教師役を務め生徒同士がお互いに学びを深める機会とし、また沖縄FWのグループテーマを決定する参考とした。次の6つを事前研究の大きな枠組みとして設定した。

- ①沖縄戦
- ②沖縄基地問題
- ③沖縄の社会・経済
- ④沖縄の歴史と教育
- ⑤沖縄と世界
- ⑥沖縄の生活様式

本研究に入る前の班とは異なる班構成のもとで、自分の興味・関心のあるテーマを深く探る機会とした。漠然とした自分の沖縄へのイメージを確認したり、思い込みを訂正したり、新たな発見となる活動を目指した。1クラス6グループが上記の①～⑥テーマ別の指導教官のもとで発表の準備をし、各クラスで発表をした。発表は1グループ約15分程度で、クイズ形式の発表、パソコンや写真を活用した発表、寸劇による発表、沖縄の食べ物を持参しての発表等が展開された。一人一人が本研究の研究テーマを考え、選択する機会となった。

この事前研究での学習後、沖縄本研究での研究テーマを各自が決定し、沖縄研究旅行での研究グループへと繋げていった。この沖縄本研究でも大きな枠組みを6つ設定し、各クラスで6名から8名の研究旅行グループの班員を決定した。この過程で1つの特徴的なこととして、研究テーマへの「こだわり」が見受けられたことである。つまり、調査したい研究テーマを確固として持っていることを感じさせる場面が見られた。やはり、事前研究による興味・関心への掘り起こしがある程度うまく行ったことを感じさせられた。

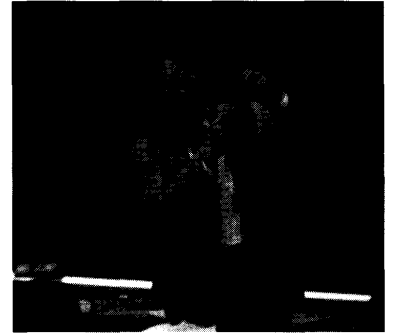


事前研究発表の様子

## 3. 沖縄フィールドワークのオリエンテーション

沖縄のフィールドワークを前にしてフィールドワークの具体的方法や、共に学び合うことの意味を北海道宗谷のフィールドワークの具体的実践を通して学びを深めた。

「共同のなかでの『学び合い』—  
教育学部・『教育経営ゼミ』の経験から—  
教育発達科学研究科  
学校教育科学講座  
植田健男先生



講義のタイトルからもわかるように生徒同士がともに学びあうことを、北海道宗谷での大学生の

フィールドワークや映画「学校」シリーズを通して学ぶことの意味を考える講義だった。沖縄でのフィールドワークへの具体的方法論だけではなく、日々の学校でのグループ学習を振り返り、学びの意味を深く考える機会となった。

なぜ学ぶのかを深く考えさせられた生徒は、「なぜ勉強しなければいけないのかと思うことがよく（常に）あります。高校に入ってから勉強は難しいし、大変だし、なげだしたくなるけど、今日話を聞いて少し考えが変わりました。初心に戻って改めて「学ぶこと」について考えてみるとやはり学ぶことは大変だけど大事なことで、必要なことだと思います」と書いている。

また、ある生徒は、「高2になってくると、学び=大学に行くための勉強になってしまっていた。今日の講演は初心に戻る為のものだと思いました。今の時代弱肉強食です。所詮弱者は負けるのです。しかし、他人に負けたいための勉強より、一生残していける学びをしていきたいと思った」と講義を振り返っている。

さらに、宗谷での実践に関心を持った生徒は学校を創るということに新鮮な驚きを感じ「学校を創るということをあまり考えたことはなかった。先生と親が作り、子どもは受け取るものだと思っていたから。子ども、親、地域、先生が沢山の意見をまとめ、良い結果を出すのは難しいと思う。それでも、もしすべての学校がそういう風になったら学校というものが、また違った良いものになるといった」と感想を書き残している。

## 4 沖縄研究旅行

—グループ別フィールドワークを中心に—

この沖縄研究旅行では、フィールドワークを中心とした学習により、総合人間科『国際理解と平和』の理解を深め、検証することを具体的な目的にした。

より具体的な目的としては：1) 南部戦跡を巡り、平和セレモニーを実施することによって戦争当時の様子を知る。2) 米軍基地について知り、沖縄の置かれている現状を理解する。3) 班行動によるフィールドワークを実施する中で、仲間との交流を図り自分たちの探求心を満たす。以上の3項目を下位の目的として定めた。

沖縄研究旅行フィールドワークでは以下の6グループにわけて、次のような研究テーマを生徒が設定した。

### ①沖縄戦

- A-1 沖縄戦と軍と家族
- A-2 未来へつなげる沖縄
- C-1 沖縄での戦いが沖縄県民に与えた影響

### ②沖縄基地問題

- A-3 基地、その存在の重み—米軍基地による環境問題、事件、事故、経済的影響—
- B-3 基地問題—基地のプラス・マイナス、基地賛成派・反対派の人々の意見—
- C-2 米軍基地—光と影—

### ③沖縄の社会・経済

- B-4 沖縄県民になろう—沖縄の税金、物価、公共料金の比較—
- C-5 沖縄の社会・経済—観光地の観光・社会・経済的な影響と環境問題—
- C-3 基地問題—基地による被害、経済的な利益—

### ④沖縄の歴史と教育

- A-4 琉球文化を探る
- B-2 21世紀のニーセーから20世紀のニーセーへ
- B-5 本土と沖縄の教育in戦時中

### ⑤沖縄と世界

- B-1 戦時中の医療—医療道具、衛生状態—
- C-4 沖縄の学校教育—アメラジアンは今昔—
- C-6 沖縄の歩んできた道とこれからの道—極東地域での日米安全保障—

### ⑥沖縄の生活様式

- A-5 沖縄の食文化—今と昔—
- A-6 沖縄を聴く
- B-6 食—変わりゆく沖縄の食文化を探る—

このようなテーマのグループ研究を通して何を調査し、何を学び、感じたのかを研究成果のまとめである研究集録から拾ってみる。

「沖縄戦」を研究テーマとして選択したグループは、戦争を直接体験した人だけではなく、戦争体験が直接ない人々の中にある戦争の傷跡に探りをいれている。沖縄戦の悲劇的な集団自決の事実を学び、正しい情報を得ることの大切さに気づく。また、戦時中の人々の心という観点から沖縄戦を分析し、また現在の沖縄県民の平和意識の変化を学び、戦争や平和の問題に無関心であることの怖さを「・・・世界では絶えず何処かで戦争が起きています。平和な時代というのはなかったと言ってもいいくらい戦争の歴史です。かと言って戦争について無関心になることはもっと恐ろしいことでしょう。・・・」(A-2)と語っている。

また、話しをしていただいた人々からの直接のメッセージを受け、平和の意味と自分にできることを掘り下げている。戦争がないこと、基本的な衣食住が可能であるだけではなく、家族がいること、笑顔で暮らせること、自分の望むことが自由にできることが平和ではないかと自分の定義を深めていく。そして、平和の意味を自分の感性で深め、自分の意見を持ち、どのような形でもよから、少しずつ行動に表していくことを感じるようになっていく。

「沖縄基地問題」のグループでは、基地問題を学習すればするほどに、基地問題が抱える問題の複雑さ、解決の困難さに深く気づいていく。また、世界の政治的リアリズムにまで考えが及んだり、日本の国防という観点からも沖縄の基地問題を考えていこうとしている。

また、基地のある沖縄で日々の生活を送っている人々の生の声を聞き、基地の現実を理解しようとしている。そして、第三者的な立場ではなく、基地問題は国家レベルの問題であり、現地の人々の権利や利益としっかりと向き合って解決策を考えていくべきではないかと考察している。「沖縄は日本の一部である。ただそう言うのではなく、それに値する本土の沖縄への『行動』が求められている。・・・」(C-2)と集録の中に記している。

「沖縄の社会・経済」グループでは、沖縄の経済状況を、多角的に調べている。世界の多くの紛争や戦争には、経済問題が根底に存在したり、直接・間接のきっかけとなる。沖縄特有の経済構造に焦点を当てながら、基地問題、環境問題を沖縄の視点から考察している。

さらに、観光立国沖縄の観光産業と環境問題とを関連づけ、珊瑚の問題から沖縄の環境破壊に警告を発したり、沖縄の経済構造の特色として、国や米軍への財政依存を指摘し、沖縄での製造業、企業の育成を説いている。また、人材育成の為の大学や専門学校の設立の必要性を指摘している。これらの基盤の必要性と、沖縄の基地問題への現実的な改革案や提言として、「・・・今沖縄から米

軍がいなくなったとしても、その跡地を有効利用したほうがよほど経済的に有益だといわれている」(C-5)という興味ある指摘をしている。

「沖縄の歴史と教育」を選択した生徒は、沖縄文化の1つの特色である「チャンプルー文化」を学んだり、同世代の女子学徒隊の生き方を学んだり、沖縄の戦時中の教育が子どもたちに与えた影響を主に調べている。

日本本土、中国、東南アジア諸国、朝鮮半島との多様な文化背景を持つ琉球文化を守ることを「異文化共生」の1つのモデルとして位置づけている。琉球文化から現代の戦争を考え、「・・・毎日イラク問題が報道されています。無理矢理に1つに統一することが正しいのでしょうか。『共生—共に生きる』ということはいろんな物を混ぜ合わせた中で協力していくというではないでしょうか」(A-4)と共生の意味を定義している。また、教育現場で沖縄文化が否定され、日本本土の文化や価値観を押しつけられことから生まれる「排除や差別」の実態を学んでいる。

また、女子学徒隊の方々と泣き、笑いながら直接話を聞くなかで、平和への深いメッセージ受けとめその決意を表し、グループの研究タイトルを「21世紀のニーセーから20世紀のニーセーへ」と名づけた。つまり、21世紀の女の子が20世紀の女の子を知り、受けとめたメッセージを次の世代に伝えていきたいという強い思いをこめている。

「沖縄と世界」のグループでは、米軍の戦後の医療の回復や衛生の向上に果たした役割を調べたり、皇民化教育を受けた衛生兵の実態などを調査している。また、沖縄はアメリカの世界戦略(主に極東)の中に位置づけられた沖縄の視点から日米関係のあり方を考察したり、基地問題と沖縄の教育の間にあるアメラジアンの問題に探りを入れている。

特に沖縄と世界との関係を考えるこのグループでは、アメリカの世界構想、世界戦略の中で暮らす沖縄の人々が直面する現実的な問題や高度な日本の安全保障の問題に探りを入れている。どちらの問題に対しても、沖縄から見える、考える政策の必要性があることを、「沖縄の魂は今、この日本をどのような目で見つめているのだろうか」(C-6)という表現から感じることができる。

最後に、「沖縄の生活様式」を選択したグループでは、沖縄の食文化、方言、音楽から沖縄の国際関係を紐解いている。戦前、戦中、戦後の食文化の変遷を調査し、沖縄の風土にあった食を時代の流れとともにどのように取り入れてきたかを明らかにしている。その食への沖縄的姿勢を「この沖縄の食材と、・・・新しいものを拒まずどんどん取り入れていく姿勢が現在の食文化をつくりあげて、長寿県としての沖縄を確立していったと私は考えます」(B-6)と記し、沖縄のチャンプルー的食文化を捉えている。また、音楽や方言においてもその多様さ、

チャンプルー的要素を明らかにし、音楽や舞踊の芸能を通じた琉球外交を調べ、沖縄の国際関係作りの伝統を深く考察している。

フィールドワークを中心とした研究内容を総括するならば、「平和」という概念を軸に、沖縄の抱える諸問題を「若者らしい」観点や感性で調査しまとめていると感じた。ここで言う「若者らしさ」とは、諸問題へのアプローチにおいて全体的な視点や精査という点には問題があるかもしれないが、組織や社会的な利害関係から離れ、存在する諸問題の原点から柔軟に問題を問う力を持っているという意味である。

研究集録のまとめと考察の中に、「・・・問題の複雑さや解決の困難さを感じる」、「・・・の問題を若い感性で見極める」、「・・・を自分の感性で深く考え、自分の考え、意見を持ちたい」という言葉が多く記されていることがその力を現している。

今回の沖縄研究旅行で、「沖縄を1つのフィールドとし、沖縄の社会、経済、歴史、生活様式、文化といった幅広い観点からともに学びながら、そこに存在する諸問題に自分がどのように関わっていくかを学び、考える機会を提供する」と掲げた目標を十分に達成できたと思う。

## まとめと考察

戦争体験のない生徒と言葉では語りつくせない戦争体験を土地の記憶として有している沖縄との出会い。沖縄という土地が醸し出す風土はこのような生徒に何を与えたのだろうか。その土地の人々が記憶として留めてきた沖縄の歴史的事実、世界の見方、コミュニティの力は生徒に何を気づかせ、何を感じさせ、何を考えさせたのか、そして何を強く記憶させたのか。このようなことを、彼らの書いた平和メッセージから拾ってみる。

闇は恐怖である。特に戦時のガマの闇はさらなる恐怖であったはずである。ところが、戦争体験者の「地上は地獄でガマの中は天国だった」の言葉に生徒の身が凍る。生徒が感じたガマの闇の恐怖を「安らげる場所」と感じさせたことが、沖縄地上戦の地獄絵を生徒はリアルに感じ、直感的に気づく。過去の記憶が今を生きる生徒に確実に伝わった瞬間である。ガマの湿気と暗闇は多くの若者に孤独感、不安を感じさせる。戦争負傷者の癒えははずの傷が腐食する様子、60年近く過ぎた今でも漂う死臭の気配、薄い空気に詰まる胸、身体全体で戦争を感知する。

戦争体験者の生々しい話から、若者はエメラルド色の青い海が軍艦で真っ黒になり、白い砂浜は生臭い血で真っ赤に染まり、デイゴやハイビスカスの花咲く街は赤い炎に包まれていたという事実を肌で感じる。両親や友だちが目前で亡くなるその現場から逃げ去ったり、亡く

なった子どもをガマに葬るという普段の生活から想像もつかない体験に衝撃を受け、言葉を失う。

写真や資料、戦争体験だけでは戦争の悲惨さをなかなか実感できないでいる生徒も、白梅の塔、ひめゆりの塔に刻まれた歴史的事実に心を動かす。理由は1つ、同世代の子どもの自決という事実には涙する。「・・・戦争の意味も分からずに戦い、苦しみ、最終的に自決をよぎなくされてしまった事実が悔しくて、悔しくて・・・。」(2 A.YMさん)と書いている。ひめゆりの塔では、ほぼ同世代の女子生徒の一人一人の写真にその子どもたちの「死に方」がきちんと記されていることに大きな衝撃を受ける。それも抵抗することなく自ら死を選んでいく姿を実感する。

遊びに、勉強に、恋に夢中なはずの同世代の友だちが、自分の目の前で死んでいく。いつ死ぬかわからない恐怖と隣り合わせて生きている事実と何不自由なく夢に向かって生活している自分たちを対比させる。この二つの世界にあるギャップが想像力をかきたて、戦争の悲劇を実感し、今の自分にできる可能な限りの力でその悲劇を受け止めようとする。白梅学徒隊として奉仕活動をしていて友人の死を見届けた戦争体験者の話を聞き、その気持ちを想像しようとしてもできなかったと率直に語っている。唯一想像できることは、もし戦争が無かったなら、青春を謳歌できただろうということと、自分が今なんと幸せなのかということだけだと記している。今までの人生経験に照らしあわせて可能な限り戦争体験者の状況を共感的に受け止めようとする。「考えても、考えても、わからなくて悲しくて、つらくて、いつの間にか涙が出てきてしまいました」(2 B.AKさん)と記している。

言葉では語りつくせない戦争の悲惨さ、醜さ、酷さを沖縄という風土の中で感じ、学び、記憶した生徒は何を心に決めるのか。多くの生徒は、「過去と未来に立つ」自分をしっかりと意識するようになっていく。つまり、沖縄の過去の事実とその過去とつながる今の事実を、自分とのつながり、いまの日本社会とのつながり、世界とのつながりから感じ、理解し、今の、これからの自分にできること、すべきことを自ら考える姿がそこにある。自分たちが21世紀を担う世代であり、戦争体験を直接聞くことができる最後の世代であることを多くの生徒が再認識し、この沖縄で学んだことを伝えたり、学んだことを基にこれからの社会を考え、行動していこうという姿がそこにある。

かれらのこのような真摯な姿勢は、「・・・私は過去の事実を全て受け止め、自分の考えを持つと思いました。これが、平和を求めるために今の私にできる精一杯のことです。そして、大人になって社会的な立場を手に入れた時に、それまで考え続けたこと、過去の真実を伝えていけばいいのだと思いました」(2 B.AKさん)、や「平和とは、・・・まずは命を大切にすることから始めなければ

いけない。・・・21世紀は僕達の時代だ。僕らが生きて、武力を使わずに物事を解決する社会をつくらなきゃ。これは未来への誓いだけではない。戦争があったという事実を受け止めたうえで結ぶ、過去との約束でもあるのだ」

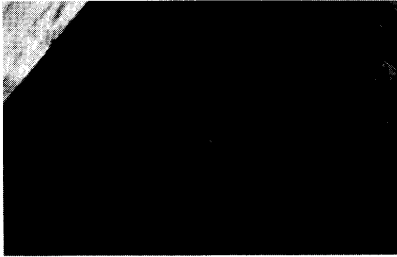
(2 A.TAくん)といったメッセージに明確に表れている。

文責 (藤田高弘)

沖縄研究旅行行程表

1日目 11月11日 (火)

名古屋空港発 \_\_\_\_\_ 那覇空港着 \_\_\_\_\_ 糸数壕 \_\_\_\_\_ 首里城公園 (司令部壕・守礼の門・首里城)  
 10:40 日本航空495便 13:10 14:40~15:40 16:30~17:20



糸数壕の中



糸数壕入り口

\_\_\_\_\_ ホテル (那覇泊) 夕食後、平和祈念講演会  
 17:50

2日目 11月12日 (水)

那覇発 \_\_\_\_\_ 嘉数高地 (普天間飛行場展望)  
 7:50 8:30~9:40



韓国人慰霊の塔

\_\_\_\_\_ 平和祈念公園 (韓国人慰霊の塔・平和祈念資料館・平和の礎)  
 10:20~12:20

\_\_\_\_\_ ひめゆりの塔・資料館 (昼食) \_\_\_\_\_ 魂魂の塔 \_\_\_\_\_ 白梅の塔 \_\_\_\_\_ ホテル (那覇泊)  
 12:30~14:30 14:35~15:35 15:45~16:30 17:15 エイサー鑑賞・交流

3日目 11月13日 (木)

那覇発 \_\_\_\_\_ ホテル (恩納村泊)  
 8:20 終日フィールドワーク 15:30 夕食後、平和メッセージ作成

4日目 11月14日 (金)

恩納村発 \_\_\_\_\_ 座喜味城址 \_\_\_\_\_ 楚辺通信所 \_\_\_\_\_ 嘉手納基地 \_\_\_\_\_ 那覇 (昼食) \_\_\_\_\_ 那覇空港発  
 8:00 8:30~9:10 9:20~9:40 10:00~10:20 11:00~12:30 13:55

\_\_\_\_\_ 名古屋空港着  
 日本航空496便 15:50

平和宣言

私たちの世界は今、平和でしょうか。一見私たちのまわりは平和そうに見えますが、もう少し視野を広げてみてみるとどうでしょう。国外では、イラク戦争とその戦後処理をめぐる争い、相次ぐテロ、そして国内ではイラクへの自衛隊派遣と、とても平和とは言えそうにありません。

戦争を食い止め、平和な世界を築くために、私たちに出来る事とはなんでしょうか。戦争の痛みを肌で感じたことのない世代として、戦争のむごたらしさ・理不尽さを過去から学び、そこから平和の尊さを知ることが重要です。それは、私たちが戦争体験を直接聞ける最後の世代だからです。と同時に語り継いでいかなければならない世代でもあるのです。もうこれ以上、戦争を体験する世代を作ってはいけないのです。

今、私たちのいるアブチラガマは太平洋戦争の末期、日本の捨て石として唯一地上戦が行われた所です。野戦病院として、更に沖縄の人々の避難壕として使われていました。子供たちや、女性・老人を含む多くの一般市民、負傷兵などが日本兵によって集団自決を強いられ理不尽にも命を落としていった場所です。戦争のむごたらしさ・理不尽さの象徴とも言えるこの場所に今私たちは立っています。

私たちはこれからの四日間で、まず沖縄戦から戦争の真の姿を見て、平和の尊さを考えていきましょう。そしてそこから平和な世界を作るためには何が出来るのか、自分の出来る事を見つけていきましょう。この四日間の学びを基に、私たちが平和を築き上げるための礎となる事を、この沖縄の地に宣言します。